

少子化を「世代継承」からみてみると

宮原 忍

日本子ども家庭総合研究所

少子化が国の重要課題とされ、さまざまな対策が模索されている。

少子化がなぜ問題かといえば、将来、労働人口の減少によって、老人福祉の体系が維持できなくなるという説明が繰り返しなされてきた。この説明は明快で、筆者もこれに逆らうつもりはない。しかし、少子化の問題点はそれだけだろうか。

筆者は、短大の教師の職を退くに当たって、長年暖めてきた「人間論」の骨子を最終講義として、若い諸君に語った。そこで語ったことの一つは、動物と人間の違いは、文化の継承能力にあるということである。文化の存在自体はサル这个社会でも認められていることではあるが、文化を情報と事物との形で蓄積し、継承していくこと、これが人間の他の動物には見られない特徴ではないか。

我々は、数万年を超える人間の文化遺産の中に生活している。数万年に生物としての人間が進化した程度は、進化の尺度ではゼロに等しいであろう。文化こそが地球上で極めて非力な生物を強い存在に、地球環境を脅かす存在にさえも、仕立て上げた要因である。

少子化は、文化の継承についての危機と捉えることができる。しかし少子化は、文化の継承からみれば、その一面にしか過ぎない。継承には、次世代の存在だけでなく、世代間の継承機能が必要だからである。

ここでいう継承機能には、育児、教育、コミュニケーションなどが含

まれるであろう。これらはすべて、機能の低下が問題になっているものばかりである。

ドーキンスは、名著『利己的な遺伝子』において、生物個体は遺伝子の乗り物であり、遺伝子の生き残りのために、奉仕させられているという卓抜な仮説を提案したが、人間については、ミームという精神的な因子を仮定しなければならなかった。

ドーキンスの「遺伝子」を、「血」に置き換えると、日本人にはよく理解できる。かつて、わが国

では「血統を絶やさない」ことが大切なこととされてきた。しかし、芸の世界や老舗などでは、放蕩息子を廃嫡して、優秀な若者を養子として後を託すということも珍しくなかった。

リプロダクションとは、辞書によれば、「複製」あるいは「コピー」、ないし「複製やコピーを作ること」

である。大人の「人間」が「大人の人間」をつくることがリプロダクションとすれば、人間が次世代にすべてを託し終えるまで、リプロダクションは終わらない。自分の子どもだけでなく、次世代の若者を愛することで、その中には、よその国から来た若者があってもよい、若者たちを自分たちの後継者として育てること、これが現在要求されることなのではないか。

最後に一言、継承とは、単なる伝達ではない。世代間の対決、あるいは次世代による伝統の乗り越えも、時には必要であろう。

伝統が単なる過去の模倣となるとき、命を失う。継承されるべきは、伝統の中に生きる命である。

